

『就実論叢』第44号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2015年2月28日 発行

ゴシック小説としての *Huck Finn* における霧

(*Huckleberry Finn*, Through the Gothic Fog)

和 栗 了

ゴシック小説としての *Huck Finn* における霧

(*Huckleberry Finn*, Through the Gothic Fog)

和 栗 了

Adventures of Huckleberry Finn (1884年出版、以下 *Huck* と略す) は説明しにくいものをいくつも持つ小説である。話を Huck の心の動きに限れば、Huck はなぜ Jim の逃亡を助けたのか、Huck はなぜ “the King” や “the Duke” を徹底的に憎まないのか、Huck は忌み嫌っていた父親になぜ従うのか、理解しにくいことが多い。そしてそれゆえ様々な解釈が提示されてきた。人種の壁を超克できるのか、社会の求める正義とは何か、社会の底辺にいる人々の人間関係はどういうものか¹。大きな結論を好む読者にとっては、Huck の精神的葛藤こそがこの小説の魅力だということになる。

だが、Mark Twain (1835年～1910年) が未発表のままに残した、Huck が登場するいくつかの作品をみると、自然の力にあらためて注目せざるを得ない。あるいは、人間の卑小さをあらためて思い知らされる。この論文では、主に “Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians” (1884年執筆) と *The Adventures of Tom Sawyer* (1876年出版) とを参考にしながら、自然の力と Huck の心の動きを追ってみたい。もちろん、いまさら Huck が *genius loci* だと繰り返すつもりはない。そうではなく、自然が Huck に深甚な影響を与えている。自然のあるものが Huck の心を大きく変えている、その意味するところを追求したい。

第1章

Huck には実は登場人物達の気持ちの激変がしばしば書かれている。まず、Huck の気持ちは逃亡奴隷 Jim を助けるかどうかで大きく揺れる。16章で、奴隷狩り達が筏に乗っているのが逃亡奴隷ではないかと Huck を問い詰める。そこで、彼は一瞬の逡巡のあと、それが「白人だ」ととっさに嘘をつく。

I didn't answer up prompt. I tried to, but the words wouldn't come. I tried, for a second or two, to brace up, and out with it, but I warn't man enough—hadn't the spunk of a rabbit. I see I was weakening; so I just give up trying, and up and says—
“He's white.” (*Huck* Ch. 16, 125)

ここで Huck が問題とする勇気とは、奴隷制社会で生きる白人としての勇気、つまり逃亡奴隷を密告する勇気なのだろうけれども、読者は密告しない Huck の勇気の方がはるかに大きいことを分かっている。つまり、Huck には白人社会の求める勇気が無かったから「逃亡奴隷だ」と言えなかったのだが、それと同時に、白人社会の押し付ける価値観を疑うだけの勇気があったからこそ、「白人だ」と返答したのである。Huck の心情の激変と精神の強さを示す場面である。

Huck の心理の急激な変化はその前からあった。15章の最後で、Huck は Jim への心酔を語る。Cairo 周辺の川幅の広いところで、夜中に、カヌーに乗った Huck と筏に乗った Jim とが離れてしまい、翌朝に再会した場面である。霧と嵐に見舞われ、Huck の安否を心配した Jim は Huck と再会して心から喜ぶ。Huck は Jim の語る嵐を黒人奴隷特有の妄想だと茶化すと、それを逆に Jim に非難されて、Huck は Jim との関係を考え直し、次のような劇的な行動をとる。

But when he did get the thing straightened around, he looked at me steady, without ever smiling, and says:

“What do dey stan’ for? I’s gwyne to tell you. When I got all wore out, wid work, en wid de callin’ for you, en went to sleep, my heart wuz mos’ broke bekase you wuz los’, en I didn’ k’yer no mo’ what become er me en de raf’. En when I wake’ up en fine you back agin, all safe en soun’, de tears come en I could a got down on my knees en kiss’ yo’ foot I’s so thankful. En all you wuz thinkin’ ’bout, wuz how you could make a fool uv ole Jim wid a lie. Dat truck dah is *trash*; en trash is what people is dat puts dirt on de head er dey fren’s en makes ’em ashamed.”

Then he got up, slow, and walked to the wigwam, and went in there, without saying but that. But that was enough. It made me feel so mean I could almost kissed *his* foot to get him to take it back.

It was fifteen minutes before I could work myself up to go and humble myself to a nigger—but I done it, and I warn’t ever sorry for it afterwards, neither. I didn’t do him no more mean tricks, and I wouldn’t done that one if I’d a knowed it would make him feel that way. (*Huck* Ch. 15, 105)

白人が黒人奴隷の足に口づけして陳謝するなど、少なくともこの小説の中では考えられない。Twain が子供の頃、Missouri 州 Hannibal では黒人奴隷と子供達とは友達同士だったというが²、それでもここでの Huck の急激な心の変化は説明できない。

また、Jim もここで自らの心情を強い言葉で吐露している。逃亡奴隷としては身の安全をはかるためには白人とともに移動することが不可欠であり、Jim は Huck を利用せねばなら

なかった。つまり Jim は Huck が言うことにはすべて従わなければならなかったはずである。それなのに Huck を「人間のクズだ」とまで言って非難する時、Jim は決して口にはしない心の奥底を口に出したことになる。Jim の命がけの告発と言ってよい。

Huck は登場人物の心の動きが強く表現された小説である。登場人物の急激で不可解な心情の変化が何度も描かれている。そのひとつに、16章の Dick Allbright の改心がある。筏乗りたちが航行中の退屈しのぎにほら話をする。Ed と呼ばれる筏乗りが同業の Dick Allbright の息子殺しの顛末を語る。Dick Allbright はまだ嬰兒だった息子を殺して樽に詰めて Mississippi 河に流した。その樽が父親の筏について回ったという話だ。ほら話の最後で、Dick Allbright は涙を流して悔悟したという。

“… They started to get out a boat to take him [Dick Allbright] ashore and lynch him, but he grabbed the little child all of a sudden and jumped overboard with it hugged up to his breast and shedding tears, and we never see him again in this life, poor old suffering soul, nor Charles William neither.”

“Who was shedding tears?” says Bob, “was it Allbright, or the baby?”

“Why, Allbright, of course; didn’t I tell you the baby was dead? Been dead three years—how could it cry?” (*Huck* Ch. 16, 118)

Dick Allbright は息子を殺して筏乗りになった。筏乗りという者の出自が推測できる話であり、16章で語られる筏乗り同士の喧嘩を読めば、筏乗りに荒くれた無法者が多かったとわかる。この逸話を語った Ed も、“The man they called Ed” (*Huck* Ch. 16, 112) であって、それが本名かどうかかわからない。ほかの筏乗りの中には、Davy Crockett (1786年～1836年) を連想させる Little Davy や、Calamity Jane (1852年?～1903年) の息子らしい the Child of Calamity と名乗るものがある。彼らは素性を隠さねばならない人物なのであり、無法者の可能性が高い。そうした社会的逸脱者に感情がないとは言わないが、筏乗り Dick Allbright は普段は泣くような人物ではなかっただろう。ところが最後に「泣いた」と語られているのである。さらに、これを語った Ed だけでなく聞いていた筏乗りも、こうした感情表現をふくむ逸話を歓迎したのである。筏乗りに見つかった Huck が “Charles William Allbright, sir” (*Huck* Ch 16, 121) と名乗る時、Huck もまたこの息子殺しの話に心動かされたひとりだとわかる。つまり、この小説は隠された感情、隠さねばならない心の動きを表現した作品でもあるのだ。

Huck の心情を他の人物が代弁することがある。“the King” と “the Duke” に対する Huck の反発を Jim が代弁している。二人のペテン師の実態をすぐに見抜いた Jim は、“I doan’ mine one er two kings, but dat’s enough. Dis one’s powerful drunk, en de duke ain’ much better” (*Huck* Ch. 20, 176) と宣言する。さらに、二人のペテン師への嫌悪は28章で Miss

Mary Jane がその憤怒を、“The brute! Come—don’t waste a minute—not a *second*—we’ll have them tarred and feathered, and flung in the river!” (*Huck* Ch. 28, 240) と叫んでいる。そして Huck 自身の短い “It was enough to make a body ashamed of the human race” (*Huck* Ch. 24, 210) という弾劾へとつながる。こうした輩はしたいようにさせるしかないのだとする Huck の人生訓であり、それは父親 Pap Finn から学んだものだとして Huck が語る時、Huck は自らの心情を隠そうとしながら語っているのである。*Huck* は Huck の心理を語った小説と言ってよい。

第2章

Huck は登場人物の感情の変化と自然とが結びついた小説である。自然の何かが Huck の心情を大きく変化させた可能性がある。まず、15章での Huck の Jim への心酔の前には夜霧がたちこめていた。

Well, the second night a fog begun to come on, and we made for a tow-head to tie to, for it wouldn’t do to try to run in fog, but when I paddled ahead in the canoe, with the line, to make fast, there warn’t anything but little saplings to tie to. (*Huck* Ch. 15, 99)

Twain の作品で印象に残る自然の描写はあまりない。だが、ここでは霧のためにカヌーと筏を岸に固定できなくなるだけでなく、筏とカヌーが離れ離れになってしまうのだ。そして先に引用した、Jim の命がけの Huck 非難とそれに応ずる Huck の悔悛へと続く。夜霧がもたらした危険は大きく、夜霧が吐露させた Jim と Huck の心の奥底も深いものである。

Twain の他の作品で、未完ながら、“Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians” でも霧は重大な働きをしている。この作品では陸上の霧だという点で *Huck* の霧とは異なるが、ここでもやはり霧の中で仲間が離れ離れになる。

Pretty soon the mist begun to thicken, and Brace told us to keep the procession closed well up. In about a half an hour it was a regular fog. After a while Brace sings out:

“Are you all right?” ….

“It’s come,” says Brace, “I knowed it would,” and we faced around and started back, shouting for Tom. But he didn’t answer.” (Twain 1989, 63)

まず Tom がついて来ていないことが分かり、行方不明になったと分かるのだ。夜霧の場面

はさらに以下のように続く。

We whooped, now and then, but I couldn't whoop much, my heart was most broke.
The fog hung on, and on, and on, till it seemed a year, and there we set and waited;
but it was only a few hours, though it seemed so everlasting. (Twain 1989, 65)

この作品での夜霧の場面の描写の長さにも注目せねばならない。この長い夜霧の場面で、Tom は Brace Johnson と Huck から離れていくのだ。水上か陸上かという違いがあるが、夜霧の中で離れ離れになる点で、Twain はこの未完作品と *Huck* で、ほぼ同じ仕掛けを使ったと言える。

河川上で離れ離れになるのと陸上でそうなるのとは根本的に違うと思われるかもしれないが、この二作品の状況はやはりかなり似ている。陸は延々と広がるのに対して川は川岸という限界がある点で異なると思われるかもしれない。つまり川岸にいれば夜霧に迷うことはなく、安全だと考えられるかもしれない。だが、*Huck* の中で夜霧が発生する個所は、川幅がかなり広い可能性があり、カヌーで移動していれば、川岸まではるかに遠いと感じた可能性が高い。*Huck* の夜霧は、Cairo の少し上流の地点から、Ohio 川との合流地点の少し下流地点までに発生したと考えると、このあたりの川幅は今日でも最長二マイルほどになる。Mississippi 河は川幅が一マイル前後あり、夜霧の中の航行はかなり危険だったと推測できる³。

話を “Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians” に戻せば、この作品の霧は人の精神を破壊し、死に至らしめる可能性を持つ恐ろしい霧だ。この作品の7章で、霧に迷い、平原で道を見失った、正気を失った、痩せこけた人物を Brace が発見する。いったん助かったこの人物は、一度に多くのものを食べすぎて結局死亡する。その後 Huck と Brace Johnson は Tom を見つけ出すが、Tom は既に正気を失いかけていた。Nebraska の平原に発生する霧は、そこで人を道に迷わせ、恐怖に陥れ、精神を破壊する力を持っている。そうした強力な外力を Twain は理解していたのである。

The Adventures of Tom Sawyer にも自然の力が登場人物たちに決断を迫る場面がある。Tom Sawyer、Joe Harper、Huck Finn の三人による Jackson's Island での泊りがけの秘密の冒険の終わりに、激しい雷雨が襲う。この冒険の初めのうち、島での生活を三人はともに陽気に楽しむのだが、夕方になると Tom と Joe は家が恋しくなる。彼らを少年達の安否を心配する家庭に戻すのは視界を遮るほど激しい雷雨なのである。

The tempest rose higher and higher, and presently the sail tore loose from its fastenings and went winging away on the blast. The boys seized each others' hands and fled, with many tumblings and bruises, to the shelter of a great oak that stood

upon the river bank. (Twain 1982, 126)

この視界を遮る雷雨の中⁴、心細くなった Tom Sawyer と Joe Harper は “a little homesick once more” (Twain 1982, 127) を感じているのだ。自然の力が少なくともこの二人に影響を与えている。

この作品の中で自然の一部が登場人物に恐怖感を与える場面はほかにもある。洞窟の中で Tom Sawyer と Becky Thatcher が迷う場面は死の危険がある。今日の Hannibal で観光名所になっている Tom Sawyer's Cave がこの小説の洞窟のモデルだとすれば、この洞窟で行方不明になった子供は現在までに何人もいる。また、この小説の中で Tom が夜の Mississippi 河を泳ぎ渡っているが、これも極めて危険な行為だ。Hannibal の親は今も昔も子供達が Mississippi 河で泳ぐことを禁じている。これも未完の “Hellfire Hotchkiss” (1897 年執筆) では、Twain の兄 Orion Clemens とみなされる Oscar Carpenter が厳寒の Mississippi 河でスケートをしていて、溺死しそうになる。コレラや麻疹の流行もあった。St. Petersburg と Hannibal が同じだとは言わないが、19世紀のアメリカ西部の田舎町には危険な場所がかなりあったのだ。

雷雨などの自然が心の奥底にある何かを目覚めさせるとする体験は、Twain の幼い日々に通ずる。『自伝』の中で、雷鳴が道徳心をよみがえらせた Twain は語る。

I can remember those awful thunder-bursts and the white glare of the lightning yet, and the wild lashing of the rain against the windowpanes. By my teachings I perfectly well knew what all the wild riot was for—Satan had come to get Injun Joe. I had no shadow of doubt about it… With every glare of lightning I shriveled and shrunk together in mortal terror, and in the interval of black darkness that followed I poured out my lamentings over my lost condition, and my supplications for just one more chance, with an energy and feeling and sincerity quite foreign to my nature. (Twain 2010, 398)

Twain の『自伝』は基本的に創作であり、特に道徳心や良心に関する部分は信じ難い。事実別の個所では子供の頃雷鳴をたのしんでいたと書いている⁵。それでも上のように主張している以上、彼が雷鳴におびえた時もあったのであり、それが作品に反映されたと解釈できる。雷鳴や霧や嵐、あるいは底知れぬ洞窟の入り口に子供達が恐怖感を抱いたことがあり、Twain もそうした記憶があると考えてよい。

第3章

さて、ここでゴシックという概念をまとめておく。William Godwin (1756年～1836年) や Mary Shelly (1797年～1851年) といったイギリスの作家で有名なゴシック小説は、単なる恐怖小説ではない⁶。文学事典がまとめる定義をまず参照する。

Most Gothic novels were tales of mystery and horror, intended to chill the spine and curdle the blood. They contained a strong element of the supernatural and the now traditional 'haunted house' props. Often they were set in medieval castles which had secret passages, dungeons, winding stairways, a stupefying atmosphere of doom and gloom and a proper complement of spooky happenings and clanking spectres. (Cuddon 289)

中世風の古い建物や古城が醸し出す不気味な雰囲気人間の中の何かを投影するものとして、恐怖感を与える。古い建造物の全てが恐怖感を与えるのではない。また、単に恐怖感を与えるのがゴシック小説ではない。その外界のあるものが誰かの奥深い感情と感応し、恐怖をつくりだすのだ。つまり外界の何かが人間の恐ろしい部分を引き出し、映し出すのである。

アメリカでは Charles Brockden Brown (1771年～1810年) や Nathaniel Hawthorne (1804年～1864年) が、先住民が潜む森や山、あるいは平原も、白人に恐怖を与えるものであることを示した。ヨーロッパのように中世以前の古城が点在する環境とは異なり、新大陸には自然あるいは自然の一部と目されることの多かった先住民が恐怖を与えた。イギリス文学のゴシック的城はアメリカ文学では広大な自然に置き換えられたと言える。そのゴシック的大自然の中で、そこに何かがいるけれどもそれが何ものなのか判然としない恐怖こそ、アメリカン・ゴシックの特質と言える。付け加えるが、その恐怖は実はそこにいる人物の奥深い感情を反映するものであり、外界の別のなにものかが与える恐怖感ではない。この点でアメリカのゴシック小説は極めて心理的な小説なのである。

Huck に戻れば、15章の霧はまさにゴシック的要素である。ここで Huck は強烈的な恐怖を感じている。

Next, for about a half an hour, I whoops now and then; at last I hears the answer a long ways off, and tries to follow it, but I couldn't do it, and directly I judged I'd got into a nest of tow-heads, for I had little dim glimpses of them on both sides of me, sometimes, just a narrow channel between; and some that I couldn't see, I knowed was there, because I'd hear the wash of the current against the old dead brush and trash that hung over the banks. (*Huck* Ch. 15, 101)

夜の霧の中、ほとんど視界のきかない闇の中で、Huck はある音を聞いて、そこに確実に存在する何か得体のしれないものに怯えているのだ。

Huck の怯えは、彼自身が造り出したものであり、夜の川霧の中で明確に認識されたものである。カヌーに乗った Huck は筏に乗る Jim と偶然に離れ離れになってしまう。その寂寥感と信頼できる人物 Jim から離れた不安感が、夜の霧に遭って強い恐怖感を生み出した。これまでのように Jim と一緒にいれば、夜の川霧が Huck に恐怖を与えることはなかっただろうし、今までと同じように夜の河を二人で下ったことだろう。夜の川霧が孤立した Huck の恐怖感を映し出したのである。そこに何かが確実に存在する、しかしその姿が判然としないもの、それがゴシック的な外界物を形成するひとつの重要な要素だとすれば、そして孤独に陥った Huck がそれに感応した時、ここで Twain が描く霧はまさにゴシックの要素を持っている。ゴシックの霧の生成である。

外界の自然物が恐怖感を与えるかどうかに関して対照的なのが、15章の霧と16章の霧である。16章の夜霧の中から姿を現すのは蒸気船だ。ここでは Huck と Jim は二人でいることに安心しきっていたため、蒸気船の接近に気が付かなかった。

Well, the night got gray and rather thick, which is the next meanest thing to fog. You can't tell the shape of the river, and you can't see no distance... We could hear her [a steamboat's] pounding along, but we didn't see her good till she was close. (Huck Ch. 16, 130)

この部分で人称代名詞が“you”から“we”にかわっていることに注目したい。“you”は一般人称だろうが、“we”は明らかに Jim と Huck なのである。「我々は蒸気船の音が聞こえただろう」と Huck は語るが、15章の霧の場面と比べると明確なように、Huck ひとりなら聞こえたはずだろうが、二人になって安心した Jim と Huck には蒸気船の音が聞こえなかったのである。この小説の霧に関するこの明白なコントラストに注目せねばならない。夜の川霧がゴシック的要素として恐怖感を抱かせるのではない。Huck が意識していたかどうかは別にして、15章では孤独に陥った Huck が抱いていた恐怖感が夜霧によって顕現化したのだ。

16章の Dick Allbright の話もその超自然的な内容からゴシック的逸話だと言える。船乗りたちのほら話として語られるこの息子殺害事件は、雷鳴、筏の原因不明の停船、樽の出現とゴシック的要素に富んでいる。本名不明の Ed という筏乗りが語る幽霊物語である。Dick Allbright が乗った筏が Buck Miller の船着場に近づくとき必ずあるものが川面に現れ、その筏の遡航を止めたという。“‘Dick Allbright, what made you think that thing was a bar'l, when it was a half a mile off,’ says I” (Huck Ch. 16, 114-115) と問われているように、数百メートル離れた川面に浮かぶ物体が樽だと Dick Allbright には分かるのだ。それは彼の

心の奥深くの悔悟が認識させるのである。泣き止まない幼い息子を殺して死体を樽に詰めて川に流したとする彼の経験がはるかな物体を「あの樽だ」と認識させるのだ。その後筏はその場で嵐と雷鳴に見舞われ、雷で二人の筏乗りが死亡し、最後は Dick Allbright が樽の中にあつた赤子の死体を抱いて川の底に沈んだ、と Ed が語り終える。

アメリカの巨大な自然はゴシック的要因をつくり出すと同時に、そこにいる人々に何らかの感情を与える要因ともなりえる。恐怖感や寂寥感を与えたり、正気を失わせてしまう場合もある。つまり、自然環境が人間の精神と感情に多大な影響を与え得る。そうした自然と人間精神との感応を Twain は感じ取り、*Huck* で作品化したのだ。

ところで、19世紀後半にアメリカに Hudson River School という絵画の一派があつた。彼らの絵画は迫力ある大自然を描き、高い山や大きくうねる川、広大な森林、大洋、海の巨大な生き物、などを特徴とし、人物は小さく描かれることが多い。人物が描かれない場合もあった。代表的な画家としては Thomas Cole (1801年～1848年)、Frederic Edwin Church (1826年～1900年) などが、アメリカの大自然とその中の微小な人間を描いた。19世紀のロマン派的絵画運動だと言われているこの一派の運動は20世紀の Grant Wood (1891年～1942年) などにもつながっていった。詳しい議論は別の機会に譲るが、いずれの画家も、人間の精神に与える力強い自然の影響力をひとつの特徴として描いたと考えられる⁷。

19世紀は人間の心の奥底を探ろうとする芸術運動がいろいろな名前のもとに行われた。*Frankenstein, or the Modern Prometheus* (1818年出版) を書いた Mary Shelley はロマン派とみなされ、Hawthorne、Edgar Allan Poe (1809年～1849年)、Herman Melville (1819年～1891年) はアメリカン・ルネサンスあるいはアメリカのロマン派とみなされる。Laurence Sterne (1713年～1768年) に代表される「センチメンタリズム」と呼ばれる、人間の心の動きを描こうとするひとつの流れが脈々とあつた。このような用語を使うとすれば、*Huck* は、ゴシック的要素を持つ霧や雷雨によって登場人物の心が大きく変化する点で、ゴシック・センチメンタリズムの作品と言える。

だが、こうした「ゴシック」や「ハドソン・リヴァー派」、「アメリカン・ルネサンス」、「リアリズム」、「西部文学」という評語を使うことで、*Huck* の何か重要なものが理解できたと主張するつもりはない。理解のひとつの足場になることは事実だとしても。

人間の心の奥底の不可解なものが、アメリカの自然と連動していると *Huck* は感じているのだ。そしてその不可解な自然が人間をある程度支配している。Mississippi 河が強烈な力で Jim と *Huck* の二人を河下に押し流していることを想起すべきである。自由を求める Jim が進むべき方向が「北」であるにもかかわらず、河は Jim と *Huck* を南に押し流す。その決定的不合理は Mississippi 河という自然によって実行されていることを読者は思い出さねばならない。つまり、不合理な自然が人間を支配しているのだ。さらに自然の一部である霧や雷鳴が人の心を大きく変えることがあつた。理性や合理主義では説明のつかない感情の動きとその奥深さを、夜霧に包まれた Mississippi 河は象徴しているのだ。

Works Cited and Consulted

- Bomarito, Jessica, Project Editor. *Gothic Literature: A Gale Critical Companion*. 3 vols. Michigan: Thomson Gale, 2006.
- Cuddon, J. A. *A Dictionary of Literary Terms*. Revised Edition. London: Andre Deutsch, 1977.
- LeMaster, J. R., James D. Wilson eds. *The Mark Twain Encyclopedia*. New York & London: Garland Publishing, INC., 1993.
- Mark Twain. *The Adventures of Tom Sawyer*. California: University of California Press, 1982.
- . *Adventures of Huckleberry Finn*. California: University of California Press, 1985.
- . *Huck Finn and Tom Sawyer among Indians and Other Unfinished Stories*. California: University of California Press, 1989.
- . *Mark Twain's Autobiography. Vol. 1*. California: University of California Press, 2010.
- Sattelmeyer, Robert, J. Donald Crowley eds. *One Hundred Years of Huckleberry Finn*. Columbia: University of Missouri Press, 1985.
- Waguri, Ryo. *Mark Twain and Strangers*. Tokyo: Eihousha, 2004.

¹ *Huck* の精神的な葛藤などについては、例えば、Jeffrey Steinbrink の “Who Wrote *Huckleberry Finn*?: Mark Twain's Control of the Early Manuscript” (Sattelmeyer and Crowley 1985, 85-105) や、James M. Cox の、“A Hard Book to Take” (Sattelmeyer and Crowley 1985, 386-403) などの研究がある。また、社会の底辺にいる人々の人間関係については拙論 *Mark Twain and Strangers* の 6 章で論じた (Waguri 2004, 105-121)。

² Mark Twain は自伝の中で、Hannibal での黒人奴隷と白人少年との関係は親密だったとして、次のように語っている。

All the negroes were friend of ours, and with those of our own age we were in effect comrades. I say in effect, using the phrase as a modification. We were comrades, and yet not comrades; color and condition interposed a subtle line which both parties were conscious of, and which rendered complete fusion

impossible. (Twain 2010, 211)

³このような恐ろしい霧を Twain はどこで経験したのか、まだまだ議論の余地がある。Missouri 州 Hannibal は季節によって霧が発生する可能性が高いし、夏場にスコールのような瞬雨も時々ある。Tennessee 州 Jamestown 周辺も夏には湿度の高い地域である。Connecticut 州 Hartford や New York 州 Elmira の可能性もある。

⁴霧も激しい雷雨も洞窟も、視界を遮る点で共通している。自然の中で、視界を遮断された空間が生じ、そこで人の感情が動くというパターンである。この点で、後に述べる Hudson River School の絵画とは状況が異なる。

⁵Twain は、子供の頃、母方の叔父の John Adams Quarles (1801年～1876年) の Missouri 州 Florida の家で経験した雷雨について、次のように楽しんだという。

I remember the raging of the rain on that roof, summer nights, and how pleasant it was to lie and listen to it, and enjoy the white splendor of the lightning and the majestic booming and crashing of the thunder. (Twain 2010, 217-8)

⁶*The Mark Twain Encyclopedia* によると、*The Adventures of Tom Sawyer* はゴシック小説だと言える。

From a larger perspective, *Tom Sawyer* can stand as representative of Twain's serious use of gothic during the early and middle years of his work. (LeMaster 1993, 333)

ただし、この事典の“Gothic”の項目を執筆した Roger Salomon はゴシック小説の持つ心理的表現について言及していない。

⁷Thomas Cole, *Il Penseroso* (1845年) を以下に引用する。大自然の中の感情表現を端的に表す作品である。



Allison R. Ensor の “The Illustrating of *Huckleberry Finn*: A Centennial Perspective” (Sattelmeyer and Crowley 1985, 255-281) はこの小説と絵画との関係を考える上で参考にした。